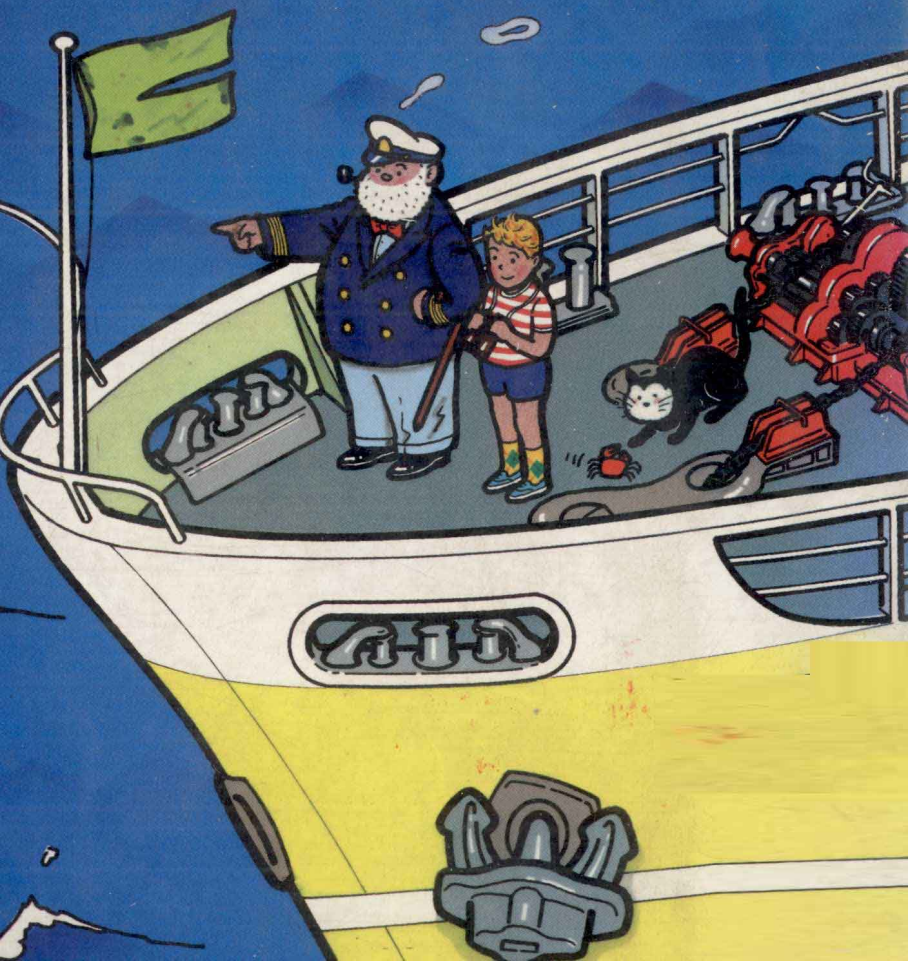


ズボン船長さんの話

角野栄子 作

鴨沢祐仁 画



福音館土曜日文庫

ズボン船長さんの話

角野栄子 作

鴨沢祐仁 画

福音館書店



著者・画家紹介

角野栄子（かどの えいこ）一九三五年東京に生まれた。早稲田大学教育学部英語英文科を卒業後、出版社に勤めた。一九六〇年ブラジルまで船の旅をし、二年間滞在。帰国後、ノンフィクション『ルイジアンニ・少年』（ポプラ社）でサンパウロの少年の生活をかき、これがきっかけで子どもの本の世界に入るようになった。主な著書に『ネッシーのおむこさん』（金の星社）『わたしのママはしずかさん』（偕成社）『サラダでげんき』（福音館書店こどものとも）など多数。東京在住。

鴨沢祐仁（かもざわ ゆうじ）一九五二年岩手県北上市に生まれた。岩手大学特設美術科を中退して一九七二年ごろ上京、デザインの仕事にたずさわりながら、雑誌『ガロ』や『ピククリハウス』などに自作の漫画を発表してきた。先ごろ作品集『クシー君の発明』が、青林堂より刊行されている。



福音館土曜日文庫

ズボン船長さんの話

一九八一年七月二十日初版発行

著者 角野栄子

発行 福音館書店

東京都千代田区三崎町一丁目

一番九号 郵便番号一〇一

電話（〇三）二九二三四〇一（代）

振替口座 東京五一七六四五

本文・表紙印刷 精興社

製本 積信堂

凸製版 大森製版所

NDC 913/三八〇ページ/一九センチ

乱丁落丁はお取替えいたします

©1981 Eiko Kadono

はじまりの章……………3

第一章……………15

お話 海の苔船のこと……………26
こけぶね

第二章……………55

お話 ドードー鳥の羽根のこと……………59
ちようはね

第三章……………88

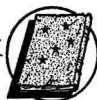
お話 柄のとれたおなべのこと……………93
え

第四章……………129

お話 茶色にひからびた種のこと……………135



第五章		160
お話 四角い石のこと		170
第六章		200
お話 古いぶどう酒のびんのこと		206
第七章		235
お話 三輪車のペダルのこと		240
第八章		272
お話 海賊の手帖のこと		279
第九章		312
お話 黒猫 くろねこ ファイファイのこと		325
終りの章		362



ズボン船長さんの話

はじまりの章

家がゆれたような気がして、ケンは目がさめました。汗で少し冷たくなった体をひきずるようにして、窓のほうに向けると、カーテンのすきまから、朝の光がひとすじ強くさしこんでいました。頭がくらくたとして、ケンは思わず目をつぶりました。いやな気分なのでした。のどを空気が通るたびに、小さなひきつるような音をたてて、信号を送ってくるのです。それは、持病のぜんそくが、ケンをおそおうかどうしようかと迷っている音なのでした。

(また、はじまるのかな)

ケンは、だるい体を起こすと、ベッドのはじに腰をおろしました。

ケンの病気のためにいいというお医者さんのすすめもあって、東京から近く、比較的水がきれ

いだといわれているこの海辺の町で、ケンとおかあさんふたりは、夏休みをすごすことにしたのでした。そして、うつてきてからきのうまでの五日間、信じられないほどケンの体は調子がよかったです。やっとあいつともおさらばかと、ケンははれぱれとした気持ちになっていたのです。

（やっぱり、だめなのかな）

ケンはもうがっかりしてしまって、体の力をぬくと、うしろにひっくり返りました。そして、切っても切れない、このやっかいな病気を思っ、ちょっと鼻をつまらせました。

しばらくしてケンは、目だけ台所のほうに向けて、

「かあさん」と呼びました。「家がゆれたようだけど……」

「おや、ケン、きょうははやいのね。元氣そうね」

おかあさんのみち代さんは、エプロンで手をふきふき、顔をのぞかせました。

（元氣そう……だって。また、かあさんのいつものごあいさつだ。毎朝おまじないみたいに同じことをいうんだから……氣休めいって）

ケンは、みち代さんの顔を見ずに、むすっと起きあがりました。

「ぼくは、家がゆれたみたいって、きいたんだ」

「そうなのよ。今、この道にね、ひっこしのライトバンが通ったのよ。あの岡^{おか}のてっぺんの家に、どなたか越^こしてきたらしいわ」

みち代^{みちよ}さんは窓^{まど}のカーテンをさっとひいてあけました。

ケンの部屋^{へや}のすぐわきを通る道は、海岸通りからなめにはいる二百メートルばかりの急な坂道です。小型^{こがた}の自動車がやっと通れるぐらいの道はばのところを、今は夏草がびっしりとしげっています。この道の入口にあるなんでも屋^やの山下商店^{やましたしやうてん}、とちゅうのケンの家、そして岡^{おか}のてっぺんの家、この三軒^{げん}の家だけでつかっている道です。正確にいうと、山下商店^{やましたしやうてん}の片側^{かたがわ}は海岸通りに面^むしていて、そっちをつかうことのほうがずっと多いので、たった二軒^{げん}のための道といっても、いいかもしれません。

この二軒^{げん}の小さな家は、山下商店^{やましたしやうてん}が貸別荘^{かじべつそう}用に建てたもので、そのひとつをケンの家で、この夏休みのあいだ、借りることにしたのでした。もうひとつのてっぺんの家は、のぼりおりが不便なためか、毎年借り手がなくて、山下商店^{やましたしやうてん}でも、いずれとりこわすつもりで荒^あれるにまかせていました。

ケンたちにはじめて会ったとき、山下商店^{やましたしやうてん}の主人は、まるでやっかいものでも見るように、岡^{おか}

のほうにあごをしゃくってから、

「だれか買ってくれたら、安く売っちゃうんですがね。ほら、ごらんない。あの岡、海につきだしているでしょ、あそこからの景色は最高ですよ。おくさん、ひとつ、いかがですか。思いきってお買いになられては。そして毎夏、ここにくるようになさっては。坊ちゃんの病氣なんて、すぐなおちちまいますよ」

と、いったことがあります。

「とうとう、あそこにも住む人が現われたのね……」

とみち代さんは、ひとりごとのようにつぶやくと、

「さあ、わたしたちも活動開始よ、ごはんにしましょ」

と部屋を出ていきました。

でもケンは、ベッドのはじめにすわったまま、とろんとした目を岡の上の家に向けていました。

ところどころさびた青いトタン屋根のとなりに、ライトバンがとまっています。そのあいだを白髪のもじりもじりした頭と、それよりちょっと高い野球帽が行ったりきたりしているのが見えます。ときどき風に乗って、「アイ、アッ」というおかしな声と、「ハイ、ハッ」というわかい



声がきこえてきました。

越してきたのは、外人かな……ケンはおもいました。

朝ごはんがすむと、みち代さんはさっそく牛乳を買いに、下の店まで行って、ひっこしてきた人のことをきいてきました。

「もと船長さんですってよ。海の見えるのが気に入ったと、あのお家をお買いになったらいいわ。すごいおとしよりで、ちょっと変わったかたですって。……東京に残ってるとうさんも、あなたの友だちのこと心配してたから、お子さんでもいるような家だったらよかったのに、おじいちゃんじゃ、がっかりねえ」

「かあさん、あれ……なんだろう」

ケンは、みち代さんの声をさえぎるように、窓のむこうのてっぺんの家を指さしました。

その家の南側、ちょうど海を見おろせるところに、細い丸太が一本、立てられようとしていました。丸太をはさんで、ふたつの頭がくっつきあい、「むーっ」とか、「ひゃー、きついなあ」というさけび声がきこえてきました。

「まあ、なんででしょうね。季節はずれだけど、鯉のぼりの竿かしら。お孫さんでも遊びにみえるのかもしれないわ。夏休みですものね。そしたら、ケン、遊んでいただいたら。よかったじゃない

「の」

「べつに」

ケンには氣のない返事を、口の中でぼそりとつぶやきました。

お昼近くになって、ライトバンは草の道をそろそろとくだっていきました。運転手はこまめにハンドルの動かしながら、口笛を吹いて通りすぎていきました。

しばらくして、あたりが静かになると、てっぺんの家からトントントンとかなづちの音がひびいてきました。ケンはその音に氣をとられ、いつのまにか胸の中のいやな音のことは、忘れていました。

ケンがぜんそくの発作をはじめておこしたのは、生まれて八カ月の赤ちゃんのときでした。お医者さんにもわからなかったのに、氣がついたのはおかあさんのみち代さんでした。みち代さんは、笛の音のように細くひく息をするケンを見て、七つのとき死んだ自分の弟を思いだしたのでした。それで、お医者さんやおとうさんの一平さんが、今はいい葉があるからだいじょうぶといくらいっても、ケンの病氣がこわくてしょうがないのです。いつもどきどきして暮らしてきたのです。そんなおかあさんの氣持がうつったのか、ケンもおくびょうな子どもでした。たまには

友だちといっしょに走りたいと思っても、大声で歌をうたいたいと思っても、なんだかこわいような気がしてやめてしまうのです。ケンがいちばん安心していられるのは、ベッドを窓辺^{まどべ}に運んでもらって、ごろごろしながら外を見ることでした。それは学校に行っても変わらなくて、もう四年生になるのに、運動場も窓^{まど}から見るだけでした。そして、こういう生活を、ケンはあまりおかしいとも思わなかったのです。

つぎの朝、目をさましたとき、ケンは越^こしてきた船長さんのことは、すっかり忘^{わす}れていました。それよりも、まずきのう感じた胸^{むね}の重さを気にして、わざとかるいせきをしました。かすかにのどがせまくなっているような、いやな気分がします。ケンは、つつむようにのどにあてていた手をゆっくりとのばし、窓^{まど}をあけかけて、あれっというように、船長さんの家のほうに細い首をねじりました。それから、ふり返って、

「かあさん、ちょっときて」と大きな声を出しました。

「ケン、ぐあいでもわるいの」

みち代^{みちよ}さんは、バジャマのまんまでとんできました。

「ちがうよ。あれ……ほら……」

ケン は、きのう立てられた丸太の先にぶらさがっているものを、指さしました。

「まあ、いったいなんでしょうねえ。洗濯もんじゃなさそうだし」

「船長さん、っていうから……船の旗かもしれない」

「ちがうでしょ。先のほうはぼろぼろだし、なんだかむらむらに色がついてるわ。旗だったら、字とか絵とか……でも、ケン、パジャマのまんまじゃ、風があたりすぎるわ。さ、着がえなさいな」

「だいじょうぶだよ」

ケンは顔をしかめて答えながら、それでもパジャマの前をきゅっと合わせました。

「ねえ、かあさん、見える？ あれ、先のほうでふたつにわかれてるでしょ、気象観測用の吹き流しって、あんな形……してるの」

「さあ、どうなのかしら……あら、もしかしたら……あれズボンじゃないかしら。ほらよく見てごらん。風に吹かれると、ベルトを通すところが見えるでしょ」

「じゃ、やっぱり洗濯もんか。なあんだ」

ケンは、急に力がぬけて、ぼそっといいました。

「でも、あれ、ひどいズボンよねえ。かあさん、ちょっと行ってきいてこようか。なにかのおま

じないですかって」

「そんなこと……きいて、どうするの」

ケンはいくたと窓によりかかりました。

ふたりが見ている前で、そのズボンは風に持ちあげられ、二、三度大きくゆれました。

その日の午後、ベッドに横になっているケンの耳に、ゆっくり坂をおりてくる足音がきこえてきました。窓わくに顔を半分かくして、そっとのぞくと、どうやら越してきたという船長さんのようです。近くで見ると、外国人ではなく、思ったより小柄な日本人でした。きのう草のあいだを見えかくれていたもじゃもじゃの毛は、耳の下からあごへと顔を一周していて、そのあいだから、しわにうずもれた小さな目が見えました。その目は歩きながら、まっすぐ海を見ていました。背中にはびんとうしろにそって、そのため、右手に持ったこげ茶色の細い杖が地面にとどかずに、ぶらぶらゆれています。アイロンがきいた白いズボンに紺の上着、袖のところのボタンはイカリの形をしていました。足ももには、まっ黒な猫が、からまるようについていきます。ケンはその猫を見て、思わず笑いそうになりました。猫の両側のほっぺたに、船長さんと同じような白髪がかたまってはえていたからです。